国際協力特別賞

子どもたちの笑顔が平和の架け橋

初芝立命館高等学校　1年　岡田　奈々愛

平和とは何を指すのだろうか。その意味は生活する国の状況や個々人で異なるのだろう。

しかし私は、国や文化が作り出すものではなく、「子どもたちの笑顔」こそが、平和の象徴ではないかと思う。

そう感じたきっかけは、中学生の時に参加した「SDGs 海外ボランティア」であった。この活動は、SDGs に関する学習と、講師としてカンボジアの子どもたちへ授業を実施するカリキュラムで構成されていた。

カンボジアは貧富の差が大きく、特に農村部はインフラ整備も進んでおらず、いまだに安全な水を利用できる割合は少ないという。さらに過去のポル・ポト政権時代には、教員や教育施設の多くが失われており、現在もさまざまな理由で、教育環境が整っていないことを知り、大きな衝撃を受けた。

私はこうした農村部の子ども向けにボランティア講師として授業を行ったのである。日本と比べるとカンボジアの子どもたちの暮らしは決して豊かとは言えない。国際機関から支給された文房具を皆んなで共有し、ノートは隅々まで真っ黒になるまで使い込んでいる。「これが現実なんだ」と胸がギュッと締め付けられる思いがした。「豊かさや、まして平和を享有することなど、まだまだ先の事なのかもしれない」と胸に抱きつつ、不安のなかで授業を始めた。

開始早々に私の不安は、子どもたちの笑顔で一瞬にして消え去ったのである。外国の子どもたちに私の話が上手く伝わるのか心配であったが、子どもたちは全員が笑顔で、一生懸命に私の話に耳を傾けてくれた。日本の事を一つでも多く学ぼうと、皆んな必死になって質問してくる。輝いている目、前のめりの姿勢、誰もが勉強することに喜びを感じているように思えた。「先生の名前はどのように発音したらいいの？」「日本の遊びを教えてもらえないか？」、次から次へと質問は止らない。何より印象的だったのは、授業中は全員が笑顔だったということだ。

平和とは、紛争がなかったり、国や地域の豊かさから生まれるものではない。「子どもたちの笑顔」が平和を体現していると感じた瞬間であった。世界中の子どもを笑顔にすることが、平和への一番の近道なのだと。

こうした経験から、私は SDGs でも掲げている「質の高い教育をみんなに」という目標に大きな関心を持つようになった。世界に目を向けると、児童労働などで教育を受ける時間がなかったり、教育を受ける環境が整備されていない等の理由で、最低限の教育を受けられていない子どもが存在している。平和の象徴とも言える「笑顔」になれない子どもたちを、私たち若者は協力して支援していかなければならない。

そこで私は、平和を実現する一歩として、「世界中の子どもに、教育用のタブレットを無償貸与し、教育を受けるだけでなく世界とつながるツールとして使用してもらう」ことを提案したい。タブレットは、世界中の子どもが分け隔てなく教育を受けるインフラであり、この存在が、平和で笑顔が溢れる未来を創り出すことを信じてやまない。

私は現在、高校で主にボランティアを中心に活動しているインターアクト部に所属しており、他校のクラブとも連携して、この取り組みの輪を拡げていくつもりだ。

タブレットの提供は、SDGs の活動に賛同してくれる企業に働きかけることで、実現の可能性を探りたい。企業にとっては、自社の社会貢献活動を PR し、企業価値を向上させる貴重な機会になるため、参画するメリットは大きいと思う。

世界中の子どもが、教育を通して輝きを得て笑顔になる。その笑顔が平和へと導いてくれる「笑顔が平和の架け橋」となるのだ。世界中の子どもたちを笑顔にするため、そして自分の将来へ希望を持てるように、私は全力でこの取り組みを推し進めていきたい。